

第6学年 社会科 学習指導案

1. 小単元名『世界の人々とともに生きる』

(教科書：『小学社会 6下』 p. 62～77 / 学習指導要領：内容（3）イ）

2. 小単元の目標

我が国の国際交流や国際協力の様子及び国際連合の働きを平和や発展への人々の願いと結びつけて、世界平和の大切さや我が国が世界において重要な役割を果たしていることを考える。

3. 小単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
国際協力の様子について関心をもち、国際協力をやってきた経緯や関係機関、携わる人々の取り組みについて、すすんで調べようとしている。	問題を抱えている人たちが安心して生活できるために国際協力が行われているということについて考え、そのことを適切に表現している。	文献資料やインターネットを活用しながら、国際協力にかかわる機関や携わる人々の考えや努力について調べることができる。	国際協力にかかわる機関や携わる人々の考えや努力について理解することができる。

4. 指導にあたって

(1) 児童の実態

本学級の児童（35人）を対象としたアンケート結果は、以下の通りである。

○社会科の学習は好きですか。

とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	きらい
6	20	7	2

○図書資料やインターネットを使って調べ学習をすることは好きですか。

とても好き	まあまあ好き	あまり好きではない	きらい
10	20	5	0

○困っている国に対して募金などを行ったことがありますか。

ある	ない
30	5

社会科の学習について好印象をもつ児童が多い。好まない児童の理由として、「調べることが多い」「覚えることが多い」という回答から、児童の切実感に迫る学習課題の設定と学習意欲を継続させる学習過程の工夫が必要となる。ただ、インターネット等を使い調査をすることは好む傾向がある。調査する目的と内容を明確にすることで、学習意欲の継続につながると考えた。

募金など、なんらかの形で困っている国への支援を行ったことがある児童は一定いるが、それが国際協力につながるという意識をもつまでには至っていない。国際協力を子どもたちにとって遠い存在ではなく身近なものとして意識づけるためにも、これまでの経験を学習の中で想起させる場面を作っていきたい。

(2) 教材について

本小単元では、スリランカに対する日本の国際協力を取り上げる。スリランカには、もともと民族間の争いがあった。それが1983年以降本格化し、26年もの長きにわたる内戦が続く状態となった。これにより、多くの市民が犠牲となった。2009年に内戦が終了したものの、地雷の撤去やインフラの整備、貧困からの脱却、28万人ともいわれる難民の救済など、課題は山積していた。

日本は、スリランカに対してこれまで累計1兆円以上の支援を行い、スリランカの復興に大きく貢献している。内戦が終結し復興が進んでいる一方で、内戦の原因となった民族間の対立は未だ解決しないままとなっている。この問題を解決するための活動として、JICA青年海外協力隊が行ったバレーボール指導を扱う。スリランカでは、バレーボールは国技ともいえるスポーツである。青年海外協力隊員は、現地で対立する二つの民族の子どもたちを同じチーム内で指導した。バレーボールを通して、お互いが自然と歩み寄り協力し合い打ち解け合う経験を重ねることで、互いの民族がともに手を取り合って生きていけることを願っての活動である。物的・金銭的支援だけでは補うことのできない心と心を結びつける支援を、バレーボールを通して行い、平和な世界を築こうとすることは、民族対立を解決したいスリランカにとって有効な国際協力と言える。

このように、本小単元においてスリランカを事例として取り上げることが、平和な国際社会を実現するための日本の役割を学習していくことに適していると考えられる。

(3) 指導上の工夫・留意点

本小単元は、教材開発・学習過程の工夫・評価の3点について視点を明確にしながらい指導を行う。

○視点1「社会を見つめ、人間の生き方を問う教材開発」

本小単元では、社会を見つめ、人間の生き方を問うためにスリランカでのバレーボール指導を取り上げる。物やお金の支援は、困っている人たちの生活環境等をよりよくしていこうとする支援であることに対して、バレーボールでの支援は人の心と心とを結びつけ民族の融和をめざした心の支援であると考えられる。民族対立が原因で長期間内戦が続いたスリランカにおいて、対立している民族同士の関係をよりよくしていこうという思いをもち、バレーボールで支援を行った人物の思いに迫る。バレーボールで支援を行った人物の思いに迫ることは、物的・金銭的支援を行うことだけが国際協力ではなく、人と人とを結びつける心の支援をすることもその国の人たちの自立を助ける立派な国際協力につながることを学ぶことができる教材と言える。

○視点2「社会についての見方や考え方をゆさぶり、思考力・判断力を育てる学習過程」

本学習は、思考力・判断力を育てるため学習計画を2段階で構成する。第1段階では、スリランカに対するODA（政府開発援助）の支援を中心に学習を進める。日本は、スリランカに対してこれまで累計1兆円以上の支援を行っている。これは、2014年現在、日本が119か国に対して行っている支援の中でも第5位の多さである。支援の内容としては、困っている国に対する上下水道の整備、

地雷の撤去、病院や橋の建設など、生活をする上で必要な整備のために使われている。子どもたちは前半の学習を通して、困っている国にお金を出したり物をつくったりすることは有効な支援であるという、国際協力についての一つの見方や考え方をもつだろう。

そのあとで、スリランカの子どもたちにバレーボールを指導している青年海外協力隊の活動をぶつける。この事実の提示により、子どもたちの中にはまだお金を必要としているスリランカに、なぜバレーボールを教えるのかという問いが生まれると考える。この問いを解決するために、これまでの学習をもとに自分なりの考えを示しながら、話し合わせる。困っている国に対する支援は物やお金だけで解決できないものもあり、人と人とをつなげることが人々の生活を安定させることにつながり、そのことが平和な世界の実現につながるのだという見方や考え方を獲得できると考えた。

○視点3「子どもを見つめ、子どもの学びをつくる評価」

子どものつぶやきを逃さずに学習を進めるようにする。発言は、ネームプレートを活用しながら板書し、それまでの発言を可視化できるように心がける。板書と自分の考えを比べることで、次の意見を出しやすくするように声かけをする。また、考えが止まりそうな子どもには、補助資料を準備し、考えをつなげることができるように支援する。

5. 小単元の指導計画（総時数 11 時間）

時	ねらい	○学習活動 ・内容	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
① （つかむ）	世界には、様々な理由で支援を必要としている国があることを知る。	○書き損じはがきを集める目的を考える。 ・お金にして学校を建てるようだ。 ○身のまわりにある、困っている国への支援の例を挙げる。 ・インドネシア、ソマリアへの支援など	◎学校で書き損じはがきを集めている様子の写真 ◆身のまわりから、困っている国に対する支援の手段を調べようとしている。 (関・意・態/ノート)
② ③ （調べる）	日本がスリランカに対して多額の支援をしているという事実から課題を設定する。	○日本のスリランカに対する支援の実績を資料から読み取る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">なぜ日本は、スリランカに1兆円以上も支援しているのだろう。</div> ・困っている人が多いのかな。 ・大きなものを作ったのかな。 ○インターネットや図書資料を使い、課題について調べ学習を行う。 ・日本は、困っている国に対して支援を行っているんだ。	◇前小単元「日本とつながりの深い国々」でスリランカについて学習をしておく、調べ学習の時間を省略できる。 ◎日本のスリランカに対するODA実績の表(外務省資料から作成) ◆日本がスリランカに対して行っている支援の実績・理由について読み取っている。 (技/ノート)

<p>④ ⑤ ⑥ (調べる)</p>	<p>1兆円の使用目的を調べ、多額のお金がスリランカの人々の生活を支えるために使われていることを知る。</p>	<p>○1兆円以上を使って、どのような支援が行われているのかを調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・病院や道路、橋など生活に必要なものがたくさん作られている。 ・内戦は終わったけれど、未だに地雷がたくさん埋まっており、その処理には、まだまだたくさんのお金が必要だ。 	<p>◎『ODAが見える。わかる。』 (JICAウェブサイト)</p> <p>◇日本の支援によって整備されているものを、スリランカの拡大地図に記していくことで、支援の内容を可視化できるようにする。</p> <p>◇ここでは必ず、内戦による被害や内戦の原因となっている民族対立のことをしっかりとつかませておく必要がある。</p> <p>◆日本がスリランカに対して行っている支援の現状について読み取り、まとめている。 (技/ノート)</p>
<p>⑦ (みつめる)</p>	<p>日本が行う国際協力に対する一つの見方や考え方を獲得する。</p>	<p>○日本が困っている国に対して行っていること(ODA)についてまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本は、困っている国が必要としている物やお金などを支援して、国際協力を行っている。 	<p>◇これまでの学習の足跡を教室掲示等でまとめ、そのまとめを見ながら考えさせる。</p> <p>◆日本が困っている国に対して行っているODAについてまとめている。 (知・理/ノート, 発言)</p>
<p>⑧ (出会う)</p>	<p>新たな学習問題に出会う。</p>	<p>○資金やインフラ整備による支援だけではなく、バレーボールで支援を行っているという新たな事実と出会い、学習問題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>資金や物をつくる支援をまだ必要としているのに、なぜバレーボールを教えるのだろうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・これまで対立していた民族間の壁を取り除くために、子どもたちにバレーボールを教えているのかな。 	<p>◎バレーボール指導を行っている青年海外協力隊の写真</p> <p>◎バレーボール(箱に入れて中身を子どもたちに考えさせる)</p> <p>◇「箱の中には、スリランカを救う秘密兵器が入っているよ」と言いながら発問し、中身を子どもたちに予想させる。</p> <p>◆これまでの学習から、箱の中身を予想している。 (関・意・態/ノート, 発言)</p>

⑨ 【本時】 ⑩ (かかわる)	新たな課題に対して、自分の考えと友達のことを比較・検討する。	○バレーボールで民族同士が融和できるか考える。 ・スリランカの発展のためには、物やお金も必要だけど、対立している民族の融和が図られることも大切だ。	◇自分たちで立てた予想をもとに、バレーボールでスリランカを支援すると判断した人物の思いに迫るようにする。 ◆スリランカの発展のためには、対立している民族同士の融和が大切であることを考えている。 (思・判・表／ノート，発言)
⑪ (まとめる)	日本が行う国際協力について、見方や考え方を成長させる。	○今後の国際協力のあり方について、自分の考えをまとめる。 ・物やお金を支援することだけでなく、人と人とを結びつける活動も大切な国際協力だ。	◆これまでの学習を振り返りながら、日本が行う今後の国際協力のあり方について、自分の考えを書いている。 (思・判・表，知・理／ノート，発言)

6. 本時の指導（第9時）

(1) 本時のねらい

資金やインフラ整備による支援ではなく、バレーボールを教えるという支援の意味について考えることができる。

(2) 本時の展開

時配	○学習活動 T：発問 C：児童の反応	◎使う資料 ◇留意点 ◆評価
5	○これまでの学習を振り返る。 T：日本は、これまでスリランカに対してどのような支援を行ってききましたか。 C：道や橋をつくったり、病院をつくったりしてきた。	◇スリランカに対して日本が多くの資金支援やインフラ整備の支援を行っていることをおさえる。
35	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 資金や物をつくる支援をまだ必要としているのに、なぜバレーボールを教えているのだろう。 </div> ○課題について、これまでの生活経験や調べたことをもとに話し合う。 C：仲がよくない民族同士を仲良くさせるためじゃないかな。 C：バレーボールでは、仲良くなれないと思う。昼休みとかサッカーをしているけど、けんかになることも多いよ。	◎これまでの学習で使用した資料を教室に掲示しておく。 ◇発表者の意見をよく聞き、それにつなげる言葉を用いながら、発表を続けるように促す。 ◇なかなか考えつかない子どもには、これまでの経験や既習事項を振り返らせ、考える手がか

	<p>C：別々のチームで試合をしたら、勝敗とかが関係して仲良くなれないかもしれない。</p> <p>C：試合が終わったら、みんな握手をしている様子をテレビでよく見るよ。別々のチームでも仲良くなると思う。</p> <p>C：一緒のチームですということが、大切なのかな。</p> <p>C：同じチームで練習をすると、友達のがんばりを見つけたり、達成感をもったりできるよね。</p> <p>C：球技とかは違うけど、今やっている長縄で、みんなが目標に向かってがんばっているとき、記録更新したら嬉しいよ。一緒にがんばってよかったと思う。</p> <p>C：私もはじめは跳ぶタイミングがわからなくて、長縄がいやだったけど、みんながタイミングを教えてくれたから、どんどんスムーズに跳べるようになったよ。</p> <p>C：みんなが、一つの目標に向かって何かをやることって、とても意味のあることなんだね。</p> <p>C：だったら、仲が悪い民族同士が同じチームで目標に向かってがんばったら、仲良くなるんじゃないかな。</p>	<p>りをもたせる。</p> <p>◇話し合いが行き詰まったときには、小集団で話し合う時間をとるなど、意見を出しやすい場面をつくるようにする。</p> <p>◇意見をできるだけわかりやすくさせるために、「例えば～」などの言葉を使って説明するように促す。</p> <p>◇子どもの思考の一助となるよう、出された意見は板書し、他の子どもの発言とつないでいく。</p> <p>◇できるだけ机間を回りながら、意見を促していく。</p> <p>◇必要に応じて、写真等の資料の提示を行う。</p>
5	<p>○もっと調べてみたいことや疑問に思ったことについて話し合い、本時の感想を書く。</p> <p>C：バレーボールで、民族同士の心と心をつなぎたかったんだと思う。</p> <p>C：資金や物をつくるのではない国際協力もあることがわかった。</p>	<p>◆話し合いの内容やこれまでの学習を生かして、バレーボールで支援を行うことの意味について考えている。 (思・判・表／発表，ノート)</p>

7. 備考

前述の視点に沿って本小単元の指導を行ったところ、以下のような成果と課題が見つかった。

○視点1「社会を見つめ、人間の生き方を問う教材開発」について

困っている国を支援するとはどういうことか。奥に隠れている思いや願いを深く考えず、表面に見えるものから簡単に判断しようとする場面が多い学級において、バレーボールを教える本当の意味を自分たちで考えていく学習は、その後の学級の様子を見てとても有効であったと感じた。他の学習場面や生活の中でも、「比べてみよう」「本当かな」など思考する様子がよく見られるようになった。また、子どもたちが本音を語る場面が少しずつ見えてきた。

バレーボールを教えることの本当の意味を考える際、自分でもバレーボールをしている子どもの言葉をスタートに、各自が意見を出していったことは、本実践で得られた大きな成果だと言える。「バレーボールを教えるのは、人と人とを仲良くさせるため」と発言したことに対して、人々が仲良くすることと国際協力の関係を結びつけられずにいた子どもが、『バレーボールで仲良くする』の意

味がよくわかりません」と発言した場面は、まさに本音を出し合う場面であったと考えられる。さらに、他教科においても「例えば～」と自分の暮らしを例に出しながら語り始める姿が少しずつ見られるようになった。ただ、そういった子どものつぶやきを教師がしっかりと取り上げられなかった。子どもの見取りを確実に言い、あらゆる発言を予想しながら授業に臨むことが、今後の課題である。

○視点2「社会についての見方・考え方をゆさぶり、思考力・判断力を育てる学習過程」について

世界平和を旨とした日本のODA活動。物的・金銭的支援だけでなく、人的支援が盛んに行われている。国際協力には、物的・金銭的支援だけでなく、人と人との心をつなぐ支援もある。「目に見えない支援」のあり方を考えさせようと思った実践であった。

第一段階では、金額面など支援の実績を可視化できる資料を作成したことで、困っている国にお金や物で支援していることをうまく意識づけることができた。また、スリランカの人々が長い間内戦で苦しんでいること、内戦の影響で生活が苦しくなっていることなど、状況をしっかりと見つけさせることで、「これからのスリランカには、物資や金銭の支援だけでなく、内戦の根源となっている民族間の対立を解決していくための支援が必要である」ことを自覚させることができたと考える。

第二段階では、第一段階の学習では解決できない課題を提示し、子どもたちの思考を促した。その後、学習課題に対する一人の考えから授業をスタートさせるようにした。一人の子どもが考えていることを他の子どもが吟味する時間をとろうと考えた。自分の経験と社会的事象を照らし合わせ、「こんなことじゃないかな」と考えながら発表する姿が少し見られるようになった。誰もが自分の暮らしを結びつけながら、他の子どもの解釈を吟味する姿が見られるようになるまで、取り組みを続けていきたい。

○視点3「子どもを見つめ、子どもの学びをつくる評価」について

前時の板書と座席表を活用することで、子どもたちの考えを一覧することができた。授業後の感想を座席表にまとめ、子どもたちの考えを把握しておく。授業を進めていくと、その思考の変化の様子を読み取ることができる。その変化から、次時の発問を考えたり提示する資料を考えたりすることができた。また、指名や授業展開にも活用することができた。しかし、前時と本時との関係や単元を通した子どもの思考の流れを、教師が見取ることができなかった。

発表された言葉だけでなく、発問したときの表情やつぶやきを本時や次時に取り上げる努力を続けることが大切であると感じた。